



Publishing house: 2-19-32 Moriyama Kanazawa
Ishikawa 920-0843 JAPAN Shinshu Otani-
ha Ryukouzan Jhokoji Phone: 076-252-4922
<https://jhokoji.net> info@jhokoji.net 2026.04.01

人生をならういえの住人

道因寺住職 相馬 豊

講堂(ならういえ)

ようこそお参りくださいました。昨日、今日と浄光寺さんの今年度の宗祖親鸞聖人御正忌「報恩講」というかたちで、御仏事が勤まっておるといふことになります。

七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり
十方来生きわもなし
講堂道場礼すべし

『浄土和讃』

こういう和讃を宗祖親鸞聖人が七十六歳の折にお作りになられました。その「講堂」ということばを聖人はどのようにならういえにいたしたか。「講」は「ならう」、「堂」は「いえ」だと。「講堂」とは「ならういえ」と、こういうふうにはじめとするお寺といふ建物を、ご本尊を中心とするお堂はそこに集う私たちに何を伝えようとするか、そしてそこで何を習っていくのか。今「習

う家」というものに、私たちは身を置いている。

また私たちの家庭生活の中にあっても、ご本尊を中心としたお内仏(仏壇)が置かれ、そのお内仏を中心として日常生活が繰り返されてきました。振り返ってみますと、我が家に一番最初にご本尊を持つてきたのはどなただったでしょうか。どうしてご本尊を私たちの生活の中にお持ちになったのでしょうか。ただ持つてきたわけではなくて、そこには願いかけられているものがある。私たちのそのご本尊を中心とした家庭生活も、実は単なる「家」ではなくて「習う家」と、こういうふうにはじめとするお寺といふ建物を、ご本尊を中心とするお堂はそこに集う私たちに何を伝えようとするか、そしてそこで何を習っていくのか。今「習

う家」というものに、私たちは日まで何を私たちに伝えてきているかというところ、これは宗祖親鸞聖人のお言葉です。「悲喜交わり流る」。つまり私たちの家というものは、悲喜の交わりが流れているということです。「悲喜」悲しみと喜びが交差しているということです。毎日の生活を営む家には、悲しみと喜びが交わっている。

そうですよ。人が生まれて喜びがあり、そしてそこで育った方々がそのお命を終えていく。私たちは新しいお命に対して喜びを感じる。亡くなった方を見送る時は、悲しみというものを持つ。つまり私たちの家は、悲喜の交わりが流れている家。そこに身を置いているということ。そしてそこに、ただ私があるわけではない。私というものは何であるかというところ、人間であるかということ、人生を歩む人、これを人間と言うのではないのでしょうか。人生を歩み続けるものを人

間と押さえていいと私は思いません。生まれてそしてその生涯を終えるまで人生を歩んできていい。

自分は正しい

その人生を歩んでいる私たちでありますけども、これは『正信偈』の中にこういうお言葉が出てまいります。「邪見じやけん驕慢きょうまん悪衆生あくしゆじやう」。「邪見じやけん」は何かというとエゴです。「驕慢きょうまん」はコンプレックスです。こういうものを私たちは持つています。もつと分かりやすく言いますと劣等感と優越感です。人生を振り返ってみると、私たちは劣等感と優越感、この二つのことで振り回されているのが現実ではないでしょうか。

私自身も今日まで六十八年間人生を歩んできておりますけども、常に葛藤し続けているのは、劣等感と優越感です。特に学生時代は劣等感と優越感がぶつかり合いました。それは何故かと

いうとテストがあるからです。点数で評価されるということですから。点数で評価されると、普段は友達であったとしても、テストでお互いに点数を確認した時に出るのが「お前より点数が良かった」です。やっぱり比較の世界の中に身を置いてしまう。スポーツでもそうですよね。できる、できないという中に、私たちは常に劣等感と優越感というものを持ちながらなんとか自分を保とうとしていく。

宗祖親鸞聖人のお言葉で言うならば、邪見驕慢の世界の中に身を置き、その劣等感と優越感の中で小さく縮こまって生きているのが私たちではないでしょうか。歌手の方が歌の中で「自分らしく」や「自分がオンリーワン」と、比べることはないというよというメッセージを送られますけども、そういう背景が今の私たちを取り巻いていると言ってもおかしくないのではないのでしょうか。

劣等感と優越感の中に私たちの人間の存在が置かれていく。そのことが年を老いていくということにおいても、自然と日常生活の中で声となって聞こえてまいります。お参りに行った際に、先輩の方々がよく言われる言葉遣いです。「もう私は、だっちゃんものになつてしまつた」と。こういうお言葉を聞きますと、何か違うと思うのですけども、確かに年を老いていくことによつて、今まで出来ていたことが一つ一つ出来なくなっていくのは事実です。今まで出来たことが出来なくなっていく。

私も普段の生活では洋服を着ている。ズボンを履いたり靴下を履いたりします。するとどうしても昔の感覚で立ったまま靴下を履く。立ったままズボンを履く。以前は片足で立っていてもふらつくことはなかったです。片足で靴下も履くこともできました。ところが今どうかというところをやってみると必ずふらつきます。靴下

も上手く履けなくなる。よろよろつとします。すると家族がそれを見ると危ないと言います。椅子に座つてすればと言う。私はそう思う反面、「私はまだそんなものではない」と。こういうふうなものがありますよね、私たちの中に。「自分はできる」という思い込みです。でも体の方はちゃんと「それはできないよ」とSOSを送ってくれている。それにも関わらず、そのSOSに素直になれない。そしてそれを見ている家族からそう言われても自分はできると。

そこにあるのは何かということ。「自分は正しい」ということです。「自分は正しい」というところに立ってしまいます。ここに立ったら必ずあることが起こります。それは争いです。自分が正しい、これが争いの根です。私の例で言いますと、椅子に座つたらどうですかと言われると、いやそうではないと自分というものを守っていく。そしてその正しさを証明するために

やってみると、転んだりする。「ああ、だから・・・」とこう言われる。そうすると、その「だから」という言葉を聞いたなら、必ずこれが出てくるのです、「そんなことはない、今たまたま転んだだけだ」と。自分を守るために必ず自分の正しさを主張します。するとそこに家族間でも何が起るかというと、争い

です。今世界でいろんな紛争が起こっております。ロシアとウクライナ、あるいはイスラエルとハマスの問題。お互いがお互いの正しさに立ってしまっているわけです。その「私は正しい」というところに立てば、必ずそこには争いが起るといふことです。家庭生活がそうですから。常に家庭でぶつかり合うのは何かというと、正しさをお互いが主張するからです。その正しさの中に「ああ、そうだな」という頷きがあつて、一歩下がれば「ごめんなさい」という言葉が出るはずなのに、それが出ない

のです。だからぶつかり合う。でも、その私たちの家庭生活というのは悲喜の交わっているところなんです。悲しみと喜びが交わり流れているのが家という場です。そしてその家の中心はご本尊です。

独尊

私たちが生まれたら名前をつける。命名という。その名を書いた紙ををご本尊の前に掲げる。これは何かというと、一人の人間が、仏の子として、その名前の中に「この人も限りある人生を生きていく人です」とそのことを確認する。そして今度、人が亡くなっていく時は、その人生の中で教えを聞いていく人として人生を歩まれました。帰依三宝、仏、法、僧の三宝に帰依する仏弟子としての生涯を終えました。だから私たちはご本尊の前でその人の亡き弔いをして生き、家から送り出してきた。まさに私たちの悲しみと

喜びが交わっている「習う家」で、「人間」というものを教えられてきたのではないのでしょうか。

今、人間というものを非常に見失つてきています。本当に人間とはどういうことなのだろうか。私たちの人間ということでは「大経」(仏説大無量寿経)の中では「無上尊」と、こういうふうに押さえられました。「無上尊」というのは上がないということ、下もないということ、比べる世界がないということ、比べる世界がない、つまり優越感も劣等感もないということです。つまり私たちの存在は「独尊」ということです。一人一人が尊いということ、一人一人の存在が尊いということなのです。その尊さの根拠がどこにあるかというと、「悲喜が流れている中に人間を見よ」ということです。人間を見るのですよ。そこにそれぞれの人生を歩んできた色んなものがあります。それを背負いながら生き続けている。

その人自体がそこにいることが尊い、そういう存在なのだ。それが独尊ということ。

私たち一人一人は、仏から見れば悲しい存在です。生まれてきた、喜ばしいことだけども、ずっと生きられるわけではないです。いずれ亡くなつていくお命を今生きています。つまりその命の連続性の中に、こゝろやうやうやうも生き続けてきています。そこに独尊ということがあ

ると思います。一月一日に能登半島の地震がありました。珠洲市に高屋という場所があります。そこは今から三十年前に中部電力と関西電力が原子力発電所を建設しようとして候補に挙げた場所です。その原発誘致をして、珠洲市は活性化をしようとした。するとやはり推進派と反対派ということが大きくなつたり合ひがありました。そのぶつかり合ひの中心が、珠洲市高屋という場所でした。もしそこに原子力発電所が

建っていたらあの一日の地震で
どうなっていたことでしょう
か。想像しただけでも恐ろしい
ことがはつきりします。

そこに塚本真如さんという方
がいらっしやいました。高屋は
土砂崩れで道路が行き来するこ
とができなくなった能登半島の
先端のところにある。その集落
全体が孤立集落になってしまっ
た。そして自衛隊によって助け
られて、高屋の町内の方々が加
賀市山代温泉の一つの旅館で共
同生活をするようになった。そ
してその時に、中日新聞が塚本
さんの取材に來られました。そ
れが新聞を通して全国に広がり
ました。

そしてその塚本さんのところ
に、全国から様々な支援物資が
届けられます。中には義援金と
いうかたちで送られてきたもの
もある。これは大聖寺で塚本さ
んがお話をされたことの中で言
われていたわけですけども、「私
は別に原発の賛成とか反対とか
という形で動いたわけではあり

ません。ただ父の言葉が耳の底
に残っていただけです。

父は私に小さい時からこのこ
とだけは繰り返し、繰り返し
言った。『決して弱いものをいじ
めてはならんぞ』と。『傷つけ
たりしてはいけません』と。『喧
嘩はするな』と。こういうこと
を常に父親から言われ続けてき
ましたと。そのことが根底にあ
るから私は別に原発反対に動い
たわけでも何でもないです』と。
周りからそういうふうにつま
みられたかもしれないけど、反対
だという根拠は何か。いじめて
はならない、人を傷つけてはい
けない。その父の言葉が自分の
中にあるからだ。だからその原
発の誘致の時にはこの根拠を
持つて反対ということに立って
いかれた。しかし一方で、塚本
真如さんという方は原発反対の
方ですよ、というふうに広
まっています。

その地震で山代温泉に避難し
てきた時、支援物資や義援金は
塚本さん個人宛に届けられたも

のだけでも、個人として受け
取っていいのだろうか。私な
ら個人宛ですから全部自分のも
のにしたいと思います。私のと
ころに届いたのだから私や私の
家族のために使おうと、こう私
たちは思っていました。特に
私の場合は。

ところが、塚本さんはそうい
う気持ちもあつたけど、周りを
見たら人がいたというのです。
周りを見たら、自分が小さい時
から高屋で一緒に暮らしてきた
人がいた。確かに三十年前に大
きな騒動はあつたとしても、一
緒に暮らしてきた。そしてあの
地震に遭つて、一緒に避難して
きた方が目の前にいると。人が
見えたというのです。人が見え
たから、塚本さんはどうされた
かという、個人宛に來た支援
物資と義援金を均等に分けて高
屋のそれぞれの所帯に分けて
いった。

すると、一人の男性からこう
言われたというのです。「これを
受け取っていいのか」と。「三十

年前、私は原発誘致賛成派とし
てあなたとぶつかったのです
よ」と。「あなたを誹謗中傷し
た者ですよ」と。塚本真如さん
は真宗大谷派のお寺の住職さん
です。その住職に対して、「う
ちのお参りには來るな、ご法事
もして欲しくないと。だから別
の住職を呼んで來て勤めた者で
すよ」と。「そういう私ですよ。
その私にこれを受け取れと言っ
ているのですね。私は正しい」
とぶつかり合った争いの根っこ
がまだ残っているのです。

そういう根っこを持ちなが
ら、塚本さんがその男性に言っ
た言葉は「三十年前のもう過ぎ
去った過去のことですよ」と。
「同時にその過去を通しながら、
高屋全員でここに避難してきた
人たちですよ」と。「過去は過
去だけでも、今、目の前の一人
一人は、地震に遭つて家が潰れ、
自衛隊に救助されるまで、それ
ぞれが自分の家にあるものを持
ち寄つてなんとか命を繋いで今

日ここに来ているのではないで
すか」と。この言葉を言われた
そうです。「同じ被災をしてい
る方ですよ」と。「何も違いあ
りません」と。

その時に言われた言葉で私が
一番印象に残った言葉が「一緒
に生きていきましょう」です。
なかなかこんな言葉は出ません
よね。「一緒に生きていきましょう
」というの。この「一緒に」
というの。「共に」ということ
でしょう。共にという根拠はど
こにあるかという人と人というこ
とです。同じ事実の中で生きて
いるから、同じ悲しみを持って
いるから、だから共に生きてい
きましょうと。

今は避難生活ですがいずれは
自分たちの命の根っこである高
屋という場に一緒に帰って行き
ましょう。何年かかっても、命
の大地、自分を生み出してくれ
た大地と一緒に戻って行きま
しょうと。

同じ悲しみを持ちながら生き
ようとする姿があるから塚本さ

んは自分宛に送られてきたもの
を均等に分けた。まさに人が見
えたということでしょう。人が
見えるというのはそこに悲しみ
を持つ人が見えるということ。
喜びを持って生きている人がい
るということ。他者の存在が自
分の中に見えるということ。そ
の他者が見えるということは優
越感も劣等感もないというこ
と。

九月二十一日の線状降水帯の
土砂崩れで仮設住宅も水浸しに
なった。多くの方々が心が折れ
たと言いましたね。心が折れる
というのは自分の思いが崩れた
のです。自分の思いは確かに崩
れたけれど、命は崩れたのです
か。何とか生きていこうと思っ
たけれど、土砂崩れによって、
心が折れましたと。自分の思い
は崩れたけれど、ではその人は
立ち上がってないのでしょうか。
か。生きていないのでしょうか。
生きています。思いは崩れ
たけれど命は生きていますので

す。その崩れた思いさえも受け
止めているのが命でしょう。私
たちはすぐ、自分はダメな者に
なってしまったと、それは思い
が崩れたのだけれど、お命その
ものは生きています。

私たちはいつも自分の思いが
叶わなくなると、劣等感を抱く、
自分の思いが叶うと優越感を抱
く。他者と比べていく。でも
命そのものは優越感も劣等感も
持っていないのです。最後の最
後まで生きよう、生きようとし
るわけです。だから私たちには
仕事があるのです。どんな仕事
か。死ぬまで生きるといいう事
です。死ぬまで生きるといいうこ
とが私たちのお仕事なのです。
どんな境遇になったとしても、
どんな環境に置かれても、最後
の最後まで生きるといいうこと
です。それが尊いといいうことな
でしょう。そういうことを教えて
くれる場を「習う家」というこ
とで押さえられるのではないで
しょうか。



でんでんむしのかなしみ

新美南吉さんという方のお作
りになられた『でんでんむし
かなしみ』。改めてこの『でん
でんむしかなしみ』を読みま
すと、本当に今の私のあり様が
浮き彫りになってくる。

いっぴぎの でんでんむしが
ありました。あるひそのでん
でんむしはたいへんなことに
きがつけました。

「わたしはいままで うっかり
していたけれど、わたしのせ
なかのからのなかにはかなし

みが いっぱい つまってる
はないか」

このかなしみはどうしたら
よいでしょう。

でんでんむしは、まず自分の
背中に悲しみがいっぱい詰まっ
ていると。私たちはどうでし
う。でんでんむしのように背中
に殻は背負っていませんけど、
この胸中には何がありますか。
今日まで人生を歩んできたわけ
です。大事な人が亡くなった時、
大事なものが壊された時、ある
いは失った時、ペットが亡く
なった時。自分の記憶を振り返
えると、涙を流してきたのでは
ないでしょうか。子供の頃、自
分の大事なものを喪失した時、
小動物が亡くなった時、まずそ
こから悲しみに出会ってきた。

そして大人になると、自分を
育ててくれた方々が、あの人も
逝き、この人も逝きと、看取り
というものに身を置き、これま
で感じなかったものを感じてき
た。「なぜ人は亡くなっていく

のだろうか」、「どうして生きて
いかなきゃならんのだろうか」
あるいは自分の人生を振り返っ
てみれば、不都合と理不尽なこ
とにぶつかり合って、「どうし
たものかな」、「どうすればいい
のかな」と。常に私たちは何か
悲しみであったり、愚痴であつ
たり、いろんなものを抱え込ん
でいたのではないのでしょうか。
この一匹のでんでんむしは
「私だ」ということです。その
「私」がでんでんむしと同じよ
うに、「この悲しみはどうすれ
ばいいんでしょうか」と。これ
も私たちも経験したことではな
いでしょうか。大事な人を亡く
した時、喪失感を味わった時、
現実として引き受けられないか
らこそ、どうしたらいいのだろ
うかと。

あるご夫婦ですけども、ご主
人が亡くなって、そして七日、
七日のお参りの際、お勤めが終
わった後、ご主人を亡くした方
がこういうことを私に言われま

した。「亡くなった主人は一体ど
こへ行ったのでしょうか？教え
てください」と。七日、七日の
お参りごとに毎週必ず私に聞い
てきました。一緒に生活してき
た夫が、亡くなって消えてしまっ
た。どこへ行ったのだろうかと。
何十年と一緒に生活してきた方
が一瞬にして亡くなった。どう
したらいいのだろうか。

同じように私たちも誰かに聞
いたことはなかったでしょうか。
「どうすればいいんだろうか」と。
そういう問いがまず起こるとい
うことです。このでんでんむし
は「その悲しみをどうしたらいい
のだろうか」と考えて一つの
行動に出ました。

でんでんむしはおともだちの
でんでんむしのところにやっ
ていきました。
どうしたらいいかという問い
が起ったから、友達のところ
へ訪ねていった。そして、まず
自分の思いを語った。

「わたしはもういきていら
れませんが」とそのでんでんむ
しはおともだちにいいました。

これも私たちがやっているこ
とではないでしょうか。「こん
な辛い目に遭ったけども、どう
したらいいのかわか」と。「何か知
恵を貸してください」と。「生
きる指針になるような言葉を教
えてください」と。こうやっ
て私たちも、常に誰かを訪ねて
いくということはしているはず
です。ところがその友達は何と
言ったか。

「なんですか」とおともだち
のでんでんむしはききました。
「わたしは、なんとというふし
あわせなものでしょう。わた
しのせなかのからのなかには
かなしみがいっぱいつまって
いるのです」
とはじめの でんでんむしがは
なしました。

ども、それぞれ生きること、苦しんだり悩んだり、挫折したり不安を抱えながらみんな必死に生きていると。初めてここに「友が見えた」、「人が見えた」ということです。

その人が見えたということ、塚本真如さんは「一緒に生きていきましよう」と。過去にぶつかり合ったかもしれないけど、今は同じ被災者なのですと。悲しみの中で行き詰まっただけで

やってこれから生きるか分からない人たち。私だけじゃないと見えた時、個人宛に来たものを均等に分けていく。まさに「人が見える」ということです。目の前の人が見えたということ、目ではなくて、本当の人間という意味を見つけたということでしょう。

「この でんでんむしはなげくことをやめました」と、他者と向き合って、自分と向き合っていて、生きていくということ、他者と向き合い、そしてその他

者を通して自分と向き合っていた時、そこに「一緒に生きていこう」という世界が開かれてくる。新美南吉さんはまさに大乘仏教の教えに基づいてこれを書かれたのではないでしょう。『でんでんむしのかなしみ』という分かりやすい言葉を通して、仏教の精神、そのことを私たちに分かりやすく語りかけられている。

私たちは「習う家の住人」です。習う家の住人の根拠は、悲喜が交わっている、悲喜の交わりが流れている。そこに身を置いていくのです。悲しみと喜びが交差する家です。そこで一人一人が認められていく、許し合って、分かり合って、理解し合って、愛し合って、慈しみ合っていて、そして一人一人の尊さを見ていく。

一番私たちにとって嬉しいのはこの言葉じゃないですか。「ここにいてもいいですよ」、「ここにいつまでもいてください」と。

安心安住する居場所が目の前に提供されることが一番の私たちの嬉しさではないでしょうか。それも一番身近な人から言われたら。気持ちももう駄目になつてしまった私に対して「そうじゃないんだよ」と。「いつまでもここにいていいんだよ」と。それを言わせるものを通して、お互いの関係が開かれていく。「独尊」、一人一人が尊い存在なのですと。

しかし生きていますから、人生山あり谷ありですよ。いろんなことがあるけど、一人一人を認め合い確かめ合う。そして敬い、尊んでいく。そのことが、私たちが求める一番大事な世界ではないでしょうか。そういうことを「習う家」。それを親鸞聖人は「講堂」と、このお寺で言うならば本堂。そして私たちの家族で、家庭で言うならば、お内仏、ご本尊を中心とした仏間が私たちの中心ですよ。そういうことを改めてこの「講堂」、「講」とはならう。「堂とはいえ」、そ

ういう言葉を親鸞聖人は現代の生きていく私たちに言葉をかけてくださっているのではないかといっただいた次第です。
二日間にわたりましたけども、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は令和六年十月十八日、浄光寺「報恩講」結願日中の法話録であります。録音機器不調の為、十七日大連夜の大部分、十八日結願日中の一部を収録できませんでした。洵に勝手ながら、収録できた部分のみを編集させていただきました。

行事のご案内

「おてらくご」

五月十七日午前十時

落語 立川吉幸

入場無料

「きこまいけ」

毎月二十八日午後二時

三月より今年度がスタート

一緒に正信偈を学びましょう